

米軍無人偵察機の日本国内への一時展開について

背景

- 我が国を取り巻く安全保障環境が厳しさを増し、周辺国の軍事活動が活発化する中、情報収集・警戒監視・偵察（ISR）活動はますます重要。
- 特に、優れたISR能力を有する米軍との協力は極めて重要であり、米軍は、2014年以降、グアムを拠点に運用されている米空軍の無人偵察機グローバル・ホーク及び米海軍のトライトンを日本（三沢飛行場及び横田飛行場）に一時的に展開。

本年における米軍無人偵察機の展開計画及びその意義

- 本年は、以下の米軍無人偵察機が日本国内へ一時展開される予定。
 - ① グローバル・ホークが横田飛行場へ展開（5月中下旬頃から約5か月間）
 - ② トライトンが岩国飛行場へ展開（5月中下旬頃から約5か月間）。

（※）トライトンは、グローバル・ホークを海洋監視用に改良した機種。
- 周辺国の動向を踏まえると、我が国周辺地域における情報収集態勢の強化は、我が国の防衛上の深刻かつ喫緊の課題。今般の一時展開は、米国による我が国防衛への揺るぎないコミットメントを示すとともに、我が国周辺における監視能力の強化をもたらし、我が国の安全保障にとって有益。

グローバル・ホーク(RQ-4)



トライトン(MQ-4)

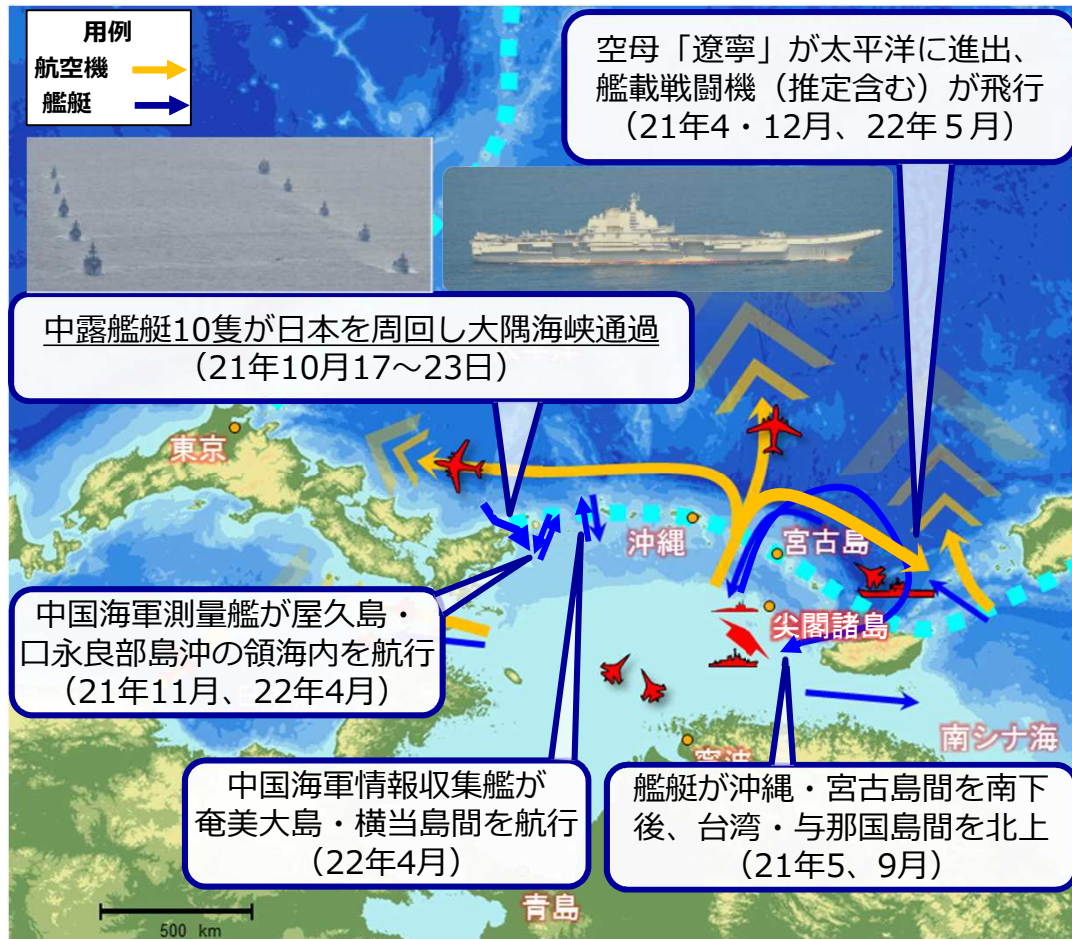


主任務	地上監視(画像等の情報収集)
日本への展開実績	・2014年5月～10月 三沢 ・2015年7月～12月 三沢 ・2017年5月～10月 横田 ・2018年6月～10月 三沢 ・2019年8月～10月 横田 ・2020年7月～9月 横田 ・2021年5月～10月 横田

主任務	海洋監視(画像等の情報収集)
日本への展開実績	・2021年5月～10月 三沢

(参考1) 我が国を取り巻く安全保障環境

- ◆ 中国は、尖閣諸島周辺を含む東シナ海を中心に、我が国周辺海空域での活動を急速に拡大・活発化。日本海・太平洋における活動を含め、今後一層拡大・活発化する見込み
- ◆ 北朝鮮は「瀬取り」を含む違法な海上での活動を継続



北朝鮮による「瀬取り」



中国艦艇が尖閣諸島周辺で恒常的に活動

- 2021年2月13日から7月19日までの間、中国海警船による尖閣諸島周辺接続水域の連続航行が157日となり過去最長に



「中国海警法」施行（21年2月）

- 曖昧な適用海域や武器使用権限等、国際法との整合性の観点から問題のある規定を含んでいる

- ◆ また、今般のロシアによるウクライナ侵略は、欧州のみならず、アジアを含む国際秩序の根幹を揺るがす行為。今回の侵略のような力による一方的な現状変更の試みを東アジアで許してはならず、平素から日米同盟の抑止力・対処力を強化していく必要

(参考2) 米無人機の比較

RQ-4B (グローバルホーク)



MQ-4C (トライトン)



機種名	RQ-4B (グローバルホーク)	MQ-4C (トライトン)
全幅	39.90m	39.90m
全長	14.50m	14.50m
全高	4.70m	4.70m
最大離陸重量	12.1t	14.6t
運用速度	574km/h	592km/h
航続距離	22,779km	15,186km
滞空時間	36時間	30時間
運用高度	15,240~19,810m	15,240~17,221m
搭載センサー	可視、赤外線、SAR、信号情報	可視、赤外線、電波収集機能、海洋レーダー (SARを含む多様なレーダーを搭載)
初飛行	1998年	2013年

※ SAR:合成開口レーダー

資料源 : Jane's Unmanned Aerial Vehicles and Targets Issue37、米空軍FACTSHEET、Northrop Grumman社パンフレット 等